

## A 語句の意味と読み

- (1) 流れて行く /×「歩いて行く」ではない
- (2) それでいて。それなのに。 /前の内容と逆のことをつなぐ
- (3) 水の流れがとどこおって、たまっている所
- (4) 水面に浮かぶ泡（あわ） /★はかないもののたとえに使う語
- (5) 例・先例 /「ためしなし」=そのような例はない
- (6) すみか／住まい

## B 文法

- (7) 打消の助動詞「ず」の連用形 /「～ずして」で「～ないで・～なくて」
- (8) 絶ゆ／ヤ行下二段活用
- (9) 断定の助動詞「なり」の連用形 /★下の「あら（ず）」と結びついて「～ではない」
- (10) あら（ラ行変格活用「あり」の未然形）＋ず（打消の助動詞「ず」の終止形）
- (11) 結ぶ／バ行四段活用 /ここは「(泡が) でき上がる」

の意

- (12) 比況の助動詞「ごとし」 /～と同じようだ・～のようだ

## C 何のたとえか

- (13) はかなく消えていく、この世の人やその住まいのたとえ。
- (14) 河の水が絶えず流れかわり、泡が消えてはできいくというありさま。
- (15) ゆく河の流れ＝世の中じたいは絶えず続いていくこと /うたかた＝そこにいる一人ひとりの人と、一つ一つの住まいがはかなく入れかわること

## D 口語訳

- (16) 流れて行く河の流れはとぎれることがなくて
- (17) それでいて、(そこを流れる水は) もとの水ではない。
- (18) 一方では消え、一方ではでき上がって、長くともまっている例はない。
- (19) この世に生きている人と、その住まいとも、また同じようである。

E 内容・記述（解答例）

(20) 「かく」＝河の水が絶えず入れかわり、泡が消えてはできていくありさま。人もその住まいも、それと同じように次々と移り変わり、同じ状態にとどまることはない、ということを述べている。

(21) 無常観 / この世のすべては移り変わり、とどまることがないという考え

(22) 続いていく世の中と、その中で消えていく個々の人や住まいを対にして示すため。(三十六字)

F 文学史

(23) 鴨長明／随筆／鎌倉時代（前期）

(24) 『枕草子』＝清少納言／『徒然草』＝兼好法師

(25) 枕草子（平安中期）→方丈記（鎌倉前期）→徒然草（鎌倉末期）

暗誦チェックの答え

ゆく河の流れは（ ）して、しかももとの水にあらず。 → 絶えず

よどみに浮かぶ（ ）は、かつ消えかつ結びて、 → うたかた

久しくとどまりたる（ ）なし。 → ためし

世の中にある人と（ ）と、またかくのごとし。 → 栖

【現代語訳（全文）】

流れて行く河の流れはとぎれることがなくて、それでいて、（そこを流れる水は）もとの水ではない。よどみに浮かぶ水の泡は、一方では消え、一方ではでき上がって、長くとどまっている例はない。この世に生きている人と、その住まいとも、また同じようである。